

# 「心の栄養」届けた300回

## 日本フィル 始まりはいびつな三重奏

多くの命が奪われた地で、故郷を失った人々を前に、音楽に何が出来るのだろう。東京を拠点とする日本フィルハーモニー交響楽団は東日本大震災の発生後まもないことから被災地に音楽を届けてきた。「演奏なんかやっているといる場合か」「売名行為じゃないのか」。時には批判を浴び、悩みながら重ねた演奏は300回を超える。なぜ、彼らは音楽を届け続けたのか。



東京電力福島第一原発事故から1カ月もたない2011年4月6日、日本フィルの楽員3人は福島県二本松市にいた。香港澳で現地の人々から託された支援物資の乾電池を届けるためだ。二本松市には、原発20km圏に入り全町避難を強いられた浪江町の町民が身を寄せていた。

「もし許可をもらえたら演奏しよう」。トロンボーン、バイオリン、ピアノを手に積み込み、東京を出発した。町側と乾電池を届ける手はずは整えたが、演奏の約束は取り付けていない。そもそも、この三つの楽器は編成としていびつだった。「この先何十年かかるか分からない道のりの始まりなんて



す」。二本松市東和支所の臨時町役場で、馬場有町長(当時)は18年に69歳で死去し、語りつた。ピオラ奏者の後藤朋俊さん(62)は思った。「とても演奏を聴いてもらうような段階ではないかも」



東日本大震災の被災地で、バイオリンを奏する松本克巳さん(中央)ら。宮城県名取市で2011年5月8日、手塚耕一郎撮影

## 「売名」批判越え 東北癒やす

怖い」と感じた。人々の表情も生活音も空気に、なにもかも張り詰めていた。それでも3人は「もしよろしければ、音楽をお届けしたい」と申し出た。避難所の中にはなく、外なら聴きたい人が足を止めてくれるのではないかと。入り口付近に譜面台を立てた。

美しい旋律から始まる「タイスの瞑想曲」に、映画「サウンド・オブ・ミュージック」から「すべての山に登れ」。そして、ロシア歌曲「赤いサラファン」。よく聴かれた日だった。やさしく伸びやかな音色が周囲の山に響いた。

演奏が終わると、3人に背を向けるように、段差に腰掛けていた高齢の男性が松本さんに声をかけてきた。「音楽を聴いてこんなに涙流したことはないよ。日本フィルは変わった歴史を持つ。1956年、フジサンケイグループの文化放送専属オーケストラとして誕生し、フジテレビとも専属契約を結んだ。しかし、72年に両社側がオケ解散と楽員の解雇を通告。オケの労働組合が雇用関係の確認を求めて両社と裁判で争う間、一部が「新日本フィル」として分裂した。残った楽員は存続を応援してくれる人々の元に出向いて演奏を続けた。

「市民とともに歩むオケケストラ」として、オケと無縁だった地域にも繰り出し、地元の人々と交流した。会社側が労働組合に解決金を支払う内容で和解し、85年に再出発した。だが、約90人の楽員がいる今も大きなスポンサーを持たず、苦しい台所事情は続く。

95年1月17日の阪神大震災の被災地にも、日本フィルは音楽を届けている。震災から1カ月後、兵庫県芦屋市立精道中の雨の降る校庭に始まり、仮設住宅の空きスペースや病院などで小さな演奏会を重ねた。

「なぜわざわざ東京から行くのか。売名のためではないか」。疑問を投げかける同業者もいた。日本フィル内部にも反対の声があった。現地との調整役だった日本フィルの元職員、宮城尚代さん(73)は「音楽は食べられない。必要とされていない。そんな意見もあった」と振り返る。一方で「応援しているという心を音楽で届けたい」と願う楽員がいた。

兵庫県西宮市で避難所運営に携わっていた男性(62)は、30年近くたった今も鮮明に演奏会を覚えている。「音楽を聴いて、お化粧を再開したり、笑顔が戻ったらしい被災者がいました。あの時、音楽は心の栄養なのだと思います」

日本フィルは東日本大震災の当日もその翌日も、東京都港区のサントリーホールで定期演奏会を予定通り開いた。多くのイベントが中止を決めていた。不確実だ」という苦情も後に届いた。それでも、開催を決断した平井俊邦理事長(81)は後悔して

いない。当日は77人、翌日は758人が来場した。「圧倒的な自然災害を前にしようという思いの、なにかやれることほいの、か、まともな考えのまままっすぐに来た人が多かったのではないのでしょうか。あの時の音楽はまるで、祈りのようでした。1週間後の香港澳でも中止しなかった。日本は必ず復興すると伝えたいと思いました」。平井理事長は振り返る。

東日本大震災の被災地訪問は乾電池を届けた二本松市の後も続いた。福島、宮城、岩手の各地から寄せられる求めに応じ、ソロ、二重奏、四重奏、五重奏など臨機応変に編成した。避難所、仮設住宅、高齢者施設、学校で演奏を重ねた。

楽員たちは音楽を届ける先々で、被災地を見て歩き、地元の人たちと語り合えば「また来てね」と声をかけられた。東日本大震災の被災地での演奏に対しても周囲から「売名行為」と言われたが、そこに行きつて演奏すれば笑顔と涙があった。

「迷いは当然ありました。音楽がどこではない人もいたでしょう。でも、音楽で心もあるとののだと思います」。阪神でも東日本でも音楽を届けた松本さんの実感だ。そんな日本フィルに福島県内のある小学校から依頼が舞い込んだ。「校歌を演奏していただきませんか。ただ、楽譜はこれから見つけるといいます」